

(西暦) 2021年 1月 26日

論文審査結果の要旨

専攻 入学年度	資源環境科学専攻 (西暦) 2014年度(4月)入学		氏名	李 曉琴
論文題目	チベット高原におけるヤクとヒツジの放牧が草地植生に及ぼす影響に関する研究			
審査委員 職名及び氏名	主査	職名 教授	氏名 西脇 亜也	
	副査	職名 教授	氏名 飛佐 学	
	副査	職名 教授	氏名 鈴木 祥広	
	副査	職名 教授	氏名 井戸田 幸子	
	副査	職名 准教授	氏名 坂本 信介	
審査結果の要旨(800字以内)				
<p>青海チベット高原では草地植生の荒廃が生じている。本論文の第1章では、この草地植生の荒廃は、家畜の生産量の減少をもたらしているが、荒廃の程度の詳細や荒廃原因については不明な点が多く、現地における放牧密度と草地植生に関する詳細な調査の必要性を示した。第2章では、青海省曲麻菜県の農家12戸に対して聞き取り調査を行なって放牧密度を算出し、最も放牧密度が高かった農家の放牧地(暖季放牧地)において植生調査を行った。その結果、他地域よりも裸地率が高く地上部現存量が少なく草地植生の荒廃が進行していることが明らかとなった。第3章では、暖季放牧地にヤク放牧実験区とヒツジ放牧実験区を複数設定して草地植生の荒廃要因を明らかにすることを試みた。放牧家畜種とブロック、調査回次が裸地率に及ぼす影響を三元配置分散分析によって検討した結果、放牧家畜種の違いによる草地の荒廃に与える影響の程度は検出されなかったが、ブロック間の差は検出されたことから空間的変動が大きいことと、調査回次による差は検出されたことから、放牧実験区設置後の時間経過と共に植生が回復したことが明らかとなった。ヒツジとヤクの放牧実験区に隣接した暖季放牧地でも同様の調査を行った結果、放牧実験区とは異なり、時間経過と共に植生は回復しておらず、冬季の放牧が裸地率を増加させて草地植生を荒廃させた可能性が高いと考えられた。第4章では、以上の結果と既報の文献情報を総合的に検討し、放牧家畜種の違いよりも、暖季放牧地における冬季の放牧の方がこの地域の草地植生の荒廃の原因となっている可能性が極めて高いと考えた。そして、草地植生の荒廃を回復させるには、ローテーション放牧によって暖季放牧地における冬季の放牧圧を減少させる方策が必要であるとの結論を提示した。</p> <p>公聴会での発表および質疑応答も適切であり、本審査委員会は論文審査および最終試験に合格したと判定する。</p>				

(注1) 論文題目が外国語の場合は日本語を併記すること。

(注2) 最後に「公聴会での発表および質疑応答も適切であり、本審査委員会は論文審査および最終試験に合格したと判定する」という文言を統一して記載すること。

(注3) 論文博士の場合は、「専攻、入学年度」の欄には審査を受ける専攻のみを記入し、入学年度の記入は不要とする。